

早稲田大学文学部中東・イスラーム研究コース3年

佐々木愛美

1, はじめに

私は、普段大学の専攻で中東世界について学んでおり、現地に赴くことでその解像度を高めたり、研修を通して様々な価値観に触れることを目的として本研修に参加した。当初はイランに行くことを想定していたものの、イラン情勢の急変によりイラン渡航は中止となり、代替研修としてオマーンとカタールに赴くことになった。当初想定していた場所ではなかったものの、現地の文化に直接触れるという私の目標は概ね達成されたことに加え、想定外の学びもあったことから、それらについて記述したい。

その前に、突然だが、この報告書の執筆日、2026年3月1日現在の状況について書こう。ここ数日、いや1日で、随分と中東の様相は揺れ動いた。アメリカとイスラエルがイランを攻撃し、それに対しイランは周辺諸国へのミサイル発射で応えた。その後、中東各国の領空閉鎖に伴う航空機の欠便が相次ぎ、イラン最高指導者ハメネイ師の死亡のニュースも流れてきた。私たちが本来行く予定だったイランは当然として、2026年2月2日から2月8日まで赴いていたオマーンとカタールも、今日本から渡航することは難しい。2025年11月に派遣プログラムの一員に選ばれてから2026年3月1日までの間、私が歩いている速度は変わらないのに、世界が急発進したり急停止したりと、目まぐるしく変わっていった。遠い異国の地でのこれらの出来事に、私は衝撃と共に、そこで出会った人々や今回の研修の関係者たちに対して思いを馳せずにはいられないでいる。この研修で得た学びや気づきは充分多かったが、研修が終わってからも、「時に予想できないほど早く、物事が変化していく」ということを強く心に刻むことになった。

2, 研修の変更と出会った人々

タイトルにもある通り、そもそもこの研修は「イラン研修」として募集された。イランに行く志望動機を書き、面接を受け、そして集まったメンバーもイランに何かしらの縁がある人は多かった。

元々、外務省の渡航レベルをもとに渡航可否判断をする（レベル3以上ではイラン渡航中止）ということは応募の段階から言われていたことだ。3だった渡航レベルが12月上旬に2に下がり、喜びとともにイラン研修に向け準備をしていた。このころに来日したイラン国際関係学院（SIR）の学生の研修に同行し、日本を案内することで、来るテヘランでの再会までに良い関係性を築こうとした。SIRの学生達は皆穏やかでユーモアに溢れ、お茶目な一面を度々見せてくれた。私はすぐに彼らのことを好きになった。忘れられないのは、東京スカイツリーのソラマチで、一人の学生が私にコロツケを奢ってくれた。強請っ

たわけではない。彼の夕飯の買い物を手伝っていたら、気付いたら一個私の分までくれたのだ。もちろん遠慮したが、以下の会話で押し切られた。

「イランでは何かを食べる時は、一緒にいる人も食べるんだ」

「それなら、次は私がイランに行ったら同じことをするよ」

「いや、イランでは僕たちがホストだから必要ない」

「でも今は私たちがホストだから、今からでも私が何か買うよ」

「いやいや、君たちはペルシャ人じゃないから必要ないよ」

完敗だった。このエピソードだけでは伝えきれないが、とにかく彼らは魅力的で、賢く、そして写真好きな、私たちの友人だった。

しかし、12月末から続いていたイラン国内の大規模デモが影響し、1月中旬、ついに渡航レベルが引き上げられた。彼らとの2月の再会は、叶わなかった。

3, オマーンとカタールでの日々と学び

1月中旬に、イラン情勢の急変を受けて渡航レベルが3になり、イラン研修は中止となった。急遽財団が用意してくれたのが、カタールで開かれたアルジャジーラ・フォーラムへの参加を含む、オマーンおよびカタールでの代替研修だ。オマーンではスルタン・カブース大学、カタールではジョージタウン大学カタール校で学生交流や発表の他、アルジャジーラという中東屈指の報道機関への訪問を行った。その他にもモスクや美術館の見学、大使館や日本企業へのヒアリングなど、普通の留学では経験できないことを短期間で沢山させてもらった。世界を代表する知識人の方々や専門家と出会い、彼らの話を聞いたことで、中東世界の地政学や経済、彼らにとっての日本の存在など多くのことを学べた。

まず、街並みについて。オマーンもカタールも、青い海と先進的な都市が海岸で私たちを出迎え、少し内側に入ると砂漠の名残とクリーム色の建物が並んでいた。また、私は現地へ赴いたら、その街並みや建造物、道路、車、人々、物価、商品などを観察しようと思っていた。景色は、都市部は特に湾岸全体で似ている印象を受けた。強いて言うなら夜のライトアップなどでセンスの違いがあるだろうか。車道は広く整備され、車が風を切って進んでいる。日本のトヨタ、日産、三菱の人気は高く、街中でも大量に見かけた。砂漠を運転できる強さを持つから人気なのだ、オマーンの大学生は言っていた。もっとも、彼自身が通学に使っていたのはランボルギーニであったが。物価はコーヒー一杯が800円くらいで高め。しかし、国有企業などに勤めている場合給料も高い。アルジャジーラのカメラマン（月収約100万円）が言っていた「high salary, high prices, no problem」には深く納得した。が、街を歩く人の大半は他国の移民労働者であり、そこまで裕福な暮らしをしているようには見受けられなかった。今回私たちが訪問したほとんどの場所は各国のエリート層や富裕層が集う場所であるために、実感はしにくかったが、きっと見えないところ

でまた別の現実があるのだろう。

研修全体を通して、どの方々と話しても話題に上がるのが、2023年から続くガザへの侵攻と、2025年6月のイラン・イスラエル間の12日間戦争についてだ。どちらも、中東だけでなく世界全体の貿易や国防、日本においてはエネルギー安全保障上欠かせない重要な事態であるにも関わらず、日本の人々でその正確な因果関係や歴史的交錯、及ぼす影響について理解している人はあまりに少ないように感じる。日本では、中東に関するニュースは、自ら意識的に幅広い情報源にアクセスしないと、欧米的言説のものばかりが集まってしまう。そうした中、中東の視点で問題をどのように捉え、動こうとしているのかを聞けた今回の機会は非常に学びになった。

大使館や現地の日本企業の方々のお話からも、イランや近隣諸国での情勢が駐在や外交、ビジネスにどう影響するかを伺えた。概して湾岸諸国は仲介外交を主とし、日本を含めた多くの国々と良い関係を築いている。実際、私たちが現地に行った2月6日には、オマーンが仲介してアメリカとイランの核合意会議が開催され始めた。この時はまさか、3月1日現在のような事態にまで発展するとは、とても考えられなかった。それほど、穏やかな景色を研修内で湾岸諸国は見せてくれた。

アルジャジーラ・フォーラムでは、イスラエルのガザへの侵攻やジェノサイドについて、明確に批判する文脈ばかりでなく、それに対するアラブ諸国の消極的な対応についても厳しく非難するスピーカーがいたり、観客の鋭い質問に対してどこか濁す対応があったりしたことが印象的だった。今、リアルな報道の場に自分がいるのだと興奮もしたし、そもそもここまで大々的にガザやイスラエルに対する話題を話す場が設けられていることが、日本と大きく異なる点だと感じた。

4, おわりに

以上のようにざっくりとだが、本研修における私自身の所感や感想をまとめた。冒頭に記載したように、現地の実際の文化・価値観を学ぶという研修前の目標は概ね達成した。今後も自身で中東に赴き関わり続けることで、よりその解像度を高められるだろうと感じている。「想定外の学び」は、この研修内でジャーナリズムの力強さや、実際の国際政治の緊張感、それを研究する教授などを目の当たりにしたことで、自身の将来の選択肢が広がったことだ。もともと、ビジネスを介して中東と日本をつなげられるような人になりたいと思っていたが、ビジネス以外にも、ジャーナリズムや政策研究・外交といった領域から中東と日本を繋ぐ道があると感じた。具体的には、メディアを通じた中東情報の発信に関心が生まれた。私は、本研修で学んだ内容を、どんな形であれ、日本と中東の未来を繋げる一助に貢献する形で社会に還元したい。

最後に、この研修を実現してくださった木村さん、ワイエブさん、その他笹川平和財団の関係者の皆様、そして、一緒に行った個性的で豊かな感性を持った素晴らしい仲間たちへの感謝で本報告書を締めたいと思う。本当に、ありがとうございました。

